

点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■140■

私の母方は樺太引き揚げ者だ。敗戦後急いで貨物列車に乗ったが、母を生んで間もない祖母が体調を崩し、やむなく下車した。不運と思いきや、

乗るはずだった引き揚げ船は撃沈された。祖父が勤めた工場をソ連人に引き継ぎ、新潟に帰還したのは2年後のこと。こうした逸話を、祖母や叔母からよく聞かされたものだ。

戦時中、多くの工場を擁する群馬は空襲の標的となった。この悲惨な記憶を風化させないため、戦後80年のことし、

戦後80年に思う

過去を他人事にしない

した。

当時の日銀前橋支店は、旧麻屋百貨店の横にあり、店舗はほぼ全焼。次長を含む職員4人、妻子2人が亡くなった。宿直日誌や回顧録には、業火から金庫を守ろうとして散った職員たちの生々しい記録が残されている。

とつが、資源争奪、経済格差、保護主義などの経済事情だ。仮に、経済的困難に見舞われても、戦争をその解決策とするこ

とだけは絶対に避けねばならない。戦終直後に、市民楽団として産声をあげた群馬交響楽団も、ことし80周年を迎える。どん底にあ

てもなお、文化や芸術を通じた復興を考えた上州人。こうした「心の余裕」は、社会に潤いとし

館も訪ねて、当時の惨状に触れた。

一度に最大の死者を出した前橋空襲では、比刀根橋たもとの防空壕に逃げ込んだ人たちが多く亡くなるという悲劇があった。この史実を盛り込んだ市民ミュージカルは、

の無念や苦勞に心を寄せ、日頃から鎮魂と感謝を続けることが、過去を

迫真の演技で心から感動が始まる。大きな要素のひとつが複合的に絡み合っ



宮 将史(みや・まさひこ) 1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、政策委員会室国会渉外課長などを経て24年7月から現職